

学生時代に読んだ本の中に、次のような話があった。

米国の大都市でバリバリのビジネススマンとして活躍している人が、南洋の島に休暇でやってきた。島には怠惰にも見えるくらいの人びりと生活している島民が多くいた。そうした人の生活を見たビジネススマンは「あなた方がなぜもつと一生懸命に働かないのだ」と尋ねた。

島民が「なぜそんなに頑張ってるかなくてはいけなのか」と尋ねた。ビジネススマンは「そうすればお金が稼げるので、私のように南の島のリゾートでゆつくりとできるだろう」と答えた。

それを聞いた島民は「でも私たちは今でもゆつたりと生活している」と答えた。

50年ぐら前にこの話を読んだ時、印象に残ったが、今改めて、この話のメッセージの重要性を感じ

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

## 論壇

る。「豊かさとは何か」「私たちの生活はどうあったら良いのか」。時代の流れの中でこの問題に真剣に考える必要がある。

50年前、日本はまだ高度成長を続けていた。私たちの生活は、日々、物質的に豊かになっていった。私が子供の頃は、冷蔵庫もカラーテレビもエアコンもなかった。移動の手段も徒歩かバスだけで、自家用車など一

### 私たちが求める「豊かさ」

部の特殊な人たちだけのものだった。そうした中で、私たちの生活は物質的にどんどん豊かになっていった。

この時代を20世紀の後半と呼ぶとすれば、この時代は物質的な成長こそが豊かさであった。それによって自然の環境が劣化し、忙しい生活の中で追い詰められる人が増えていっ

ても、それも経済成長によって解決できると考えられていた。

21世紀の前半である現代では、そうした「豊かさ」を疑問なく受け入れる人は少なくなった。食べ物に不足しても困るし、生活が便利になることは結構だ。でも、それだけではないはずだ。気候変動問題や生物多様性などの問題が世界的な課題として注目され、循環型社会の実現が地

域社会の活性化に欠かせないものであると考える人が増えているのは、その根底に私たちがどのような「豊かさ」を求めているのかが問われているからだ。

政府の中で気候変動問題を考えていると、どのようにしたら社会を好ましい方向にもっていきけるのかと、どうしても上から目線で考えがち

だ。しかし、重要なことは、一人ひとりの市民が今の時代の豊かさのあるべき姿について真剣に考え、それが結果的にポトムアップの形で環境政策などに反映されることだと思う。

大都会のビジネススマンがよいのか、南の島の島民がよいのか、という二者択一の選択を求めているわけではない。ただ、皆が大都会のビジネススマンになりたいわけでもなければ、21世紀の今と20世紀の後半でも時代が違つということを確認する必要はある。そうした視点からより多くの市民があるべき社会の姿を考えるようになれば、日本全体の環境政策のあり方にも大きな支柱ができればいい。地球環境が変わってきたのでそれに対応しなくてはいけないというのではなく、どのような地球にしたいのか、という私たちの気持ち

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。